

次 目

法悦と願行(其二).....	本多日生
開目鈔講話(第四十八講).....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(二十三).....	河合陟明
大藏經要義續篇(第二十八).....	本多日生
和歌.....	大八木義雄
記事	

○本部圖報 ○年度報告 ○入帳報告

號月五年八十四第

統 一

昭和十八年十二月二十七日 第三卷第三號
 昭和十八年三月二十八日 第三卷第一號
 昭和十八年四月一日發行 每月一冊(一日發行)

第五百七十七號

第四十八年 四月號

統

法財人編
 統 一 團 發 行

財團 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ露妙會アリ自慶會アリ
又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ執行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ
教旨ノ正明 研學ノ獨達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ實質ハ
最も根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧 則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シ
テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振振ヲ
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ
理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」
ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ襄贊シ一時金參
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ
ラル、方ヲ維持員トス
- 賛助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五
圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金
貳圓五拾錢ヲ納出セラル方ヲ正團員
トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ
無料ニテ頒布ス
- 歸友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ歸友トス

法悦と願行 (其二)

本多 日生

釋迦牟尼佛が悟を開かれた。 その釋迦牟尼佛といふのは無論、吾々が本佛として拜むところの佛陀であります。しかししばらくは人間として、悉達太子として修行をして、そして成道を遂げられたのであります。 それについてお話をするならば斯ういふことが申されて居ります。 即ち悉達太子は、どういふ順序で悟らんかといふので、長い間修行して、その修行がだんだん熟して来て、いよいよ悟を開かんとされたそのときに、その精神状態として斯ういふことを言つて居られます。

悟りといふものはたゞ、「賢ふなる」「親切になる」といふ意味ではない。 無論賢いといふ意味も含んで居り、やさしい意味も含んで居るけれども、その上に非常な好い気分、いゝ心持がなければなりません。 それは大に賢くなければならぬ、大にやさしくなければならぬが、しかし如何に賢しく親切であつても、自分の心が何となしに不愉快で、気分が悪いといふやうなことは悟りになりません。 實際さうでせう。 賢いといふこと、親切といふことがあつても、もう一つ気持のいゝといふことがなければなりません。 たゞ親切があつても、「ほんとうにお氣の毒な、何とか心配してあげたいと思ひますけれども、何分今日は腹が痛ふて、頭がうづいて……。」自分の氣分の悪いときには智慧も役に立たなければ、親切も役に立たないものであります。 自分の精神の爽やかな中からこそ、本當の智慧も、親切も生れ出るものだらうと思ひます。 その間の研究は、宗教がひとりやつて居るところで、吾闘ではさういふ大事

なところに手が着いて居らぬ。お釋迦様はそこを強くお考へになりました。さうして自分の悟を開いて行く順序に於いても、曾て或る夜、自分は閻浮樹といふ樹の下に居たことがある。その閻浮樹といふのは、丁度柏の木やうな大きな葉がある。そして天竺は非常に空が澄み切つて居ました。空気の關係で、丁度日本の秋の空の水分の少ない時のやうに澄切つて居る。月は九月が一番美しく見えると申しますが、それは空気の關係で水分が少ないから、月が鮮やかに見えるのである。あれよりもつとよく澄切つて居る、最も嚴重な状態である。そして美しく星がいつばい出て、そこへ風がそよそよと吹き、閻浮樹の葉が動く。その下に立つて大宇宙を見て居ると、きらきらと星がきらめいて、何ともいへない好い気分を感じられたのであります。あなた方も、過去に於て経験された綺麗に思つたときのことを、よく考へてご覧になるがよい。紅葉を見たのなら「あゝどうも佳いな」と思つたことがあるでせう。或は上野の櫻、櫻の花はだんだん開いて行くものではなくて、一時にはつと開かない、開きかけ、まづ六分通りといふところが佳い、さういふ櫻を見てハツと思つたこともあるでせう。その特別に氣持のよかつたこと、それを思ひ出す時に、いまの悉達太子の氣分を味ふことが出来ませう。そこでこの浮閻樹の下に於て、星の光がきらきら輝いてゐるのを見た時の、一番よかつた氣分といふものは、最早や人生を超越して、一種言ふべからざる自然の美に合して居る。所謂羽子が生えて宇宙を翔け歩くやうな、何ともいへない氣持になられた。この悦びの精神、これを擴大して進んで行かなければ、本當の悟りの氣分は得られない、といふことから、太子はますます進んでお出でになつたといふことが、お經の中に説いてあります。それから悟を開かれた佛の妙覺といふものは、やはり智慧と親切の上にその真中にもう一つ、一種言ふべからざる法樂といふものをもつて居られるのであります。佛が衆生を救はれる氣持は、賢ふしてやる、苦しみを抜いてやるといふ前に、もう一つ根本の「俺のこの悦びを分ち與へてやり度い」と思はれて居ります。彼等はよくよくよしてゐる、嬉しいといつても船を食つて居るのぢや。彼等はお汁粉を食つたときうまいとか、蕎麥食つたときうまいとかいふことを言つて居るが、舌の先で、物の味がうまいとか何とか言つても、

それは高の知れたことである。あすこの牡丹餅は特にうまいといつたところで、さう特に違ふものでないから、その悦の程度といふものはきまつて居る、従つてその悦びを思ひ出すことは出来ない。言問園子を食つた者が、「一寸うまかつたよ、去年食ひに行つた」といふたところが、さてその園子の味は然う思出さうとしても出て來ないものであります。さういふ悦びといふものは、たゞ咽喉を越す瞬間だけのものである。園子が口に入つて居る、うまいといふことは聞いて居るから、初めからうまいと思つて居るけれども、あるだけではまだうまい感じはない、箸で挟んだ、それでも何等感じがしない、口に入れる、それでもまだ舌の尖では感じがしない。これは味覺といふものが、咽喉へ入る傍のところにあるからで、物を口にくんで、それがこゝへ行つたら、うまからうがまづからうが吐出つことはない。でそこへ行つたとき、「これは牡丹餅だ、いゝなア」と思ふ、思ふけれども思つた瞬間、もうそこを通り越してすつと入つて居る。一寸通り越す、「牡丹餅、うまい。」もう通越してをる、瞬間に入つてしまふ、入つてしまへばそれ切りでもう思ひ出せない。あすこの蕎麥がうまかつたといふ、「それちや食べて見よう、ハハなる程」もう峠を越して、峠を越せばもううまいとも何とも感じが起らない。ところが法悦といふことはそれと違つて、一度有難さを握つたらば、何遍考へ出してもそこへ觸れれば、その宗教的琴線に觸れれば、いつも同じ音がして、いつも同じ悦びといふものが精神に湧いて來るのであります。これは宗教の信仰がひとり有つて居る味なのであります。信念がだんだん熟して來れば、そのことは容易に思ひ出すことが出來、そして長く續くことが出來るのであります。さういふ風な法悦といふものを握らなければならぬのであります。それは自分自身が本氣にならなければ、他人から與へられるものでないからして、自分が眞面目になつて本氣になつて、そして精神的悦びといふものを握る。その握るがために、暫く他のものは切捨て、行かなければ、精神的悦びは起らぬ。他のものは、一朝事があると、有爲轉變は世の當であるから、如何なる大夏高樓も火事に遭へば灰となり、如何なる金貨も盗まれれば無くなる。一切のものが奪はれるといふことを考へれば、自分の身體といふものも、これは病氣にもなる、病氣にならないまでもだんだん年を取つ

て行く、そしてだんだん壊れて来て、死ぬばもう全然腐つてしまうものであつて、決して頼りになるものでない。して見ると何が一番大事なものであるか、といふことを考へて、いや指輪が大事だ。指輪は見せびらかすためには大事なものが知らぬが、顔に皺がよつて、そして髪なものになつてしまへば、指輪ばかり光らしたところが仕方なくなつてしまふ。どうしても肉體といふものは或る時間だけのもので、決してさう長いものではないから、そのための一切のものは、役に立たなくなつては何にもならぬ。「いゝ着物があるけれども柄が大きくて」といふ工合に、いくら着物をつくつて置いても、七十になつてこの大柄を着ても居られないであらう。だからして全然さういふ幸福だけに生きてゐたならば、終ひにはだんだん奪はれてしまふ。一切の今まで頼みにしてゐたものは、一つとられ二つとられ、遂にはみんなとられて行く。夫を頼みにする、その夫も死んでしまふ。そのうちに年を取る、今まで着物の柄がどうのこうのと買つて置いたのが、「この年になつては」といふので着られなくなつてしまふ。いろいろ食べに行く、それも齒が抜けて来て少し固いものは食べられないといふことになつて来る。斯うしてだんだん人間の幸福といふことが奪はれて、終ひには何にもなくなり、たと腰痛が痛いとか、風邪をひいたとかいふことになつて行き、さうしてとうとう死んでしまふのである。これはなにも、さういふ厭がらせを言ふではありません。死ぬときのことを考へれば、さういふものだからして、もう一ツ「壊はれない悦びを有つて居なければならぬ」といふことを、たとひまだ十五歳でも十七歳でも、びんびんして居る時分から考へて居なければならぬ。死にかけてから「なるほど飯がよつて来ました」、そんな手緩いことではいかん。初めから逃げない生活、精神生活を理解して、そいつを盡つて置けば、今度逃げる生活の上にて少々失ふところがあつても、決して悶へるものぢやない。然るに物質的のみによつて生活しようとする、その物質の満されんことを目標として進んで居る間に、これが缺けて来る。またその缺けたところを補はんとして、こゝに何時までも満足といふものがないのであります。小さい三ヶ月から十四夜の月に至るまで、いつも自分の心のうちには不足を感じて悶へる、もう少し得たいものであると考へて居る。いよいよ十五夜の晩になつた。

なつたと思ふと生憎と雲が出てその晩は見られない。さてその翌晩になれば、もうはや新けて居る、少し新けて居る。その翌晩になればまた新けて、だんだん益々新けて来る。實に人生といふものは、さういふやうな新けたる生活にいつも居るのであります。一日から十四日までには不満足で暮し、十五日一日だけが満される、假りにその晩天氣がよくて、あゝ今夜の月は工合がいゝなと思つても、さて寝てその翌晩になるとまた新けて、真圓くなくなつて居る。況してや月に雲雲といふものが、十五夜の晩に出て來ることが多い。そこであなた方の状態を考へて見る。娘時分には自由を拘束されて、何か一つ物足らず、四日の月五日の月の氣分がある。さて理想の夫を得た、圓滿な家庭を持つたと思ふと、その理想の夫は初めのうち會社の給與が少いので、もう少ししつかりして呉れよばいよといふ氣分になる。さてまたやうやくしつかりして來たと思ふ頃には、今度は酒を飲み出す。酒をやめて、これは工合がいゝなと思ふと、病氣になる。夫が病氣にならないでも、自分が一寸弱つて來る。だからして何時も缺けて居る、何時までも精神に於て多少の不満といふことから逃れるときがない。そして年でも取つて來たら、だんだん晦の月になつて、一寸も満されることなく、終ひには隠れてしまふ。これだけを以つて人生とするならば、それはまことに可愛さうなものだ、といふことをお釋迦様が御覽になつて、自分の前世は幸福な生活であるけれども、その悉達太子の榮冠を抛ち、自分の前世の幸福といふものを全部捨てて、一切衆生を救ふべく佛とお成りになつたのであります。なるほど太子の生活は、物質上何の缺けたところのない生活を續けて行かれる。それを抛つて如何に世界の王侯が偉いといつても、それはみな自分の歡樂に耽つて居るものだ、といふ永遠の世界に眼を開き、現在の地位を捨て幸福を捨て、自分は單身山の中に入り石の上に腰かけて、寝るに蒲團なく食ふにお膳もない所に自分の身體を置いて、そして難行苦行の結果悟りを開き、一切衆生のために教へを残されたのであります。だからして「あゝ有難い」といふことが胸に應へて來る。牡丹餅を買つて「あゝ有難い」と死ぬ者はない。食ひ過ぎて心中する者はあるかも知れぬが、牡丹餅にこの身を頼みたいといふ、そんな者はあらう筈がない。けれどもお釋迦様が身を捨て、精神に饑へたる者、本當にどんな愚者で

も、如何に罪深き者でも、一切之を救ふてやるぞ、と仰言つた、そこに佛様の有難いところがあります。それが根本の世界である、どうしてもそこへ頼んで行かなければなりません。最初は自分の身體に頼る、着物が欲しい家が欲しいと物質に頼る、そして亭主に頼るが、その亭主に離れる、齒は抜けてしまふ『もうこの上は何を頼りにしていいか』といふことになつて来る。その時分あつちを向いても、こつちを向いても、慰めては呉れるがたゞ言葉だけ。『まあまあさう心配なさるな、そのうちお孫さんが大きくお成んなさるから』といったやうなことになつて、なんにもさつぱり詰らないでせう。

そこで宗教の信仰から来る法悦歡喜といふものが、一番有難いといふことになるのです。之をしつかり握つて居れば、却つて人生の辛いことに出席す度毎に、この法悦の力といふものが強く現はれて来るのであります。ところが肉體の方に幸福であると、どうもその方にごまかされて、牡丹餅を食つて居ると、それに氣を取られてしまふものだが、今日は牡丹餅がない、牡丹餅が食べられないとなると、法悦の光が現はれて来るのです。牡丹餅のあるときに、同時に法悦が現はれて呉れれば非常に工合がいいやうだけれども、この牡丹餅はまづい、少々砂糖が利かないといふときに、法悦が現はれて『これでも矢張りおいしい』といふことになり、いよいよなくなつてしまふと、一層精神の光が出て来るのだから、却つてこんな調法なものはない。

この信力といふものを與へない以上、物質といふものはどれだけ與へても、與へれば與へる程、社會を改善して萬人に幸福を與へることが出来ない。どういふ時代にもそこには多少の缺陷があるから、それを補填して呉れるものがないければ、何時までも理想の社會といふものは出来るものでない。社會どころか家庭、小さな一軒の家ですら、さう理想的なもの出来ないから、まして社會・國家・世界・人類全體といふものが理想的になるといふことは、とても思ふやうな譯に行くものでない。そこでどうしても精神生活を以つて之を補ひ、片跛行を整頓して行かなければならぬ。その希望をもつといふことはいふけれども、それが希望に止つては到底いかん。生老病死といつて、當然得られ

るものを求めるのなら何の苦しみもないが、求めて得ざるの苦しみ、得られないものを求めるんだから苦しみがある。苦勞を自分で求めるのです。その生活状態に満足さへすれば、そこに喜びが得られるのでありますから、二十四の家に住んで居る者は、それで満足すれば可いけれども、五十圓の家を見て、自分の家はどうもいかん、せめて三十圓の家を、と思ふから苦しくなります。着物なら着物でも、銘仙の着物を着ることが出来れば結構だ、もともと木綿のゴリゴリしてゐたものを着てゐた、東京では双子といふものしか着なかつたものだ、だから銘仙の着物を着ることが出来ればこんな結構なことはない、ないと思へばいけれども、銘仙ちや仕方がない、お召が着たい、と思ふから悶へる。それちやお召が着られたいかと思ふと、こんな古い柄の、いつもかつも同じものちや可笑しい、斯ういふことを考へるから苦しむので、どの位物質を與へたからつても、物質の欲望といふものはどこまでも終りの無いものだから、そこで苦しみ悶へるといふことが絶えないのであります。こゝに法悦が有難い。その有難い法悦に向つて、ものみなすべてが、その喜びの力に望んで来る。その望んで来るのを願行といふのであります。

和歌 三首

大八 木義雄

昭和十八年三月十六日名古屋常樂寺に於て執行せられたる 日生上人第十三回忌法要に臨みて供養したてまつる。

いましなは、うちてし止まむ、とこころに、いのち惜します、説かましものを

昭和十八年天長節宮中御題 庭上 讀

むつましく、雛まもる見ゆ、松あをき、庭に年経て、住めるあしたつ。

同 四月宮中月次御歌會御衆題 春 月

中州には、花もにほひて、揖斐川の、なかれのとかに、月そうつれる。

開目鈔講話

(第四十八講)

小林一郎

本講で開目鈔を終るようになりました。最後の問答の一段であります。

問て云、念佛者、禪宗等を責めて、彼等にあだまれたる、いかなる利益かあるや。

これは日蓮上人が佐渡へ流されるまでの間、念佛或は禪といふやうなものがお釋迦様の御本意に叶はない教であるといふことを屢々前後十九年の間議論をされて、その爲に又それ等の者から迫害を受けて佐渡に流されるといふやうな事になつたのであります。さういふ事をして一體何の役に立つのかといふ問ひを設けました。

答て云、涅槃經に云、若善比丘法を壞る者を見て置て呵責し、驅遣し、擧處せずんば、當に知るべし。是人は佛法の中の怨なり。若能

出家の人であつても、自分さへ間違ひがなければ宜いと思つて、世の中の正しい教を破壊するところの間違つた連中の居るのを見て、それをその儘に差置いて、これを責めもしないし、又これを排斥もしないで「擧處」といふのは相當な處分をすることが、さういふ處分もしないで、自分さへ正しければ宜いといふやうな考を有つて居る人は、モウ佛法の敵となるべきものである。これは随分激しい事を言つて居る。何故なら佛といふものは大慈悲を有つて一切の人に接するのだから、人の間違つた事をその儘置くといふことは、慈悲が足りない。何處までも間違ひを責めて直してやるといふことが本當の慈悲である。それを自分が淨らかな行ひをして居るからといつて満足して、世間の間違つた者があつてもそれを捨て置くといふことは、これは佛様の御本意に背いたことをやつて居るのだから、それは佛法の敵と言つて宜いといふくらゐに涅槃經の中に言つてある。若しその間違つた者を排斥したり、或は責めたり、又然るべき處置をして間違つた事が世の中に行はれないやうにする者があれば、それこそ本當の「我弟子」お釋迦様の本當のお弟子だ。何故ならそれは慈悲の行ひである、佛様のお心持に叶つた行ひであるから、さういふものは本當の佛弟子と言へる、又本當の聲聞である。「眞の聲聞也」といふ

く驅遣し、呵責し、擧處せば。是我弟子、眞の聲聞也等云云。佛法を壞亂するは佛法の中の怨なり。慈なくして許り、親むは、是彼が怨なり。能く糾治せんは、是護法の聲聞、眞の我弟子なり。彼が爲に惡を除くは即ち是彼が親なり。能く呵責する者は是我弟子、驅遣せざらん者は佛法の中の怨なり等云云。

答へて言ふのに、それは自分一身の爲を言へば敵を作らない方が自分の身は無論安泰である。併ながら佛の教を世に弘めるといふこの大責任を果す爲には、自分の利害損得などを考へて居るべき場合ではない。涅槃經の中にあるのに「若善比丘即ち行ひも正しく別に間違ひもない答へて言ふのに、それは自分一身の爲を言へば敵を作らない方が自分の身は無論安泰である。併ながら佛の教を世に弘めるといふこの大責任を果す爲には、自分の利害損得などを考へて居るべき場合ではない。涅槃經の中にあるのに「若善比丘即ち行ひも正しく別に間違ひもない

ことは非常に面白い。聲聞といふのは前にも申すやうに小乘の教を學んで、淨らかな行ひをして居る者が聲聞だけれども、併ながらさういふ淨らかな行ひをするのは何の爲かと言へば、更に進んで世の爲に盡すといふことであるから、その準備として自分の行ひを慎んで居る。自分一人の事だけなら本當の佛弟子とは言へない。更に進んで本當に世の中の間違つた人間を直してやるといふことが出来て初めて聲聞たる行ひが價值がある。今まで自分の一身の行ひを慎んだといふことが意味がある。斯ういふ事を涅槃經の中に言つてある。

これを章安大師（これは天台大師のお弟子で涅槃經の註釋を書いた人です）が説明して、佛法を亂して行くのは佛法の中の怨である。佛様の御本意に背いたやうなことを世の中に弘めるといふことは、これは正しい信仰を妨げるものである。人間は二つの事を信する譯には行かない。マア學問ならばいろいろの説を列べて比較研究することが出来るけれども、信仰するといふには身の力、心の力を皆打込むのだから、一つの事を信すればモウ一つ信する譯に行かない。それだから間違つた事を世の中に弘めるといふことは正しい信仰の邪魔をする事となるのだから、これは非常に大きな罪だ、斯ういふのであります。

そこが宗教の特色であります。宗教としてはモウどうしても一つを心の中心に置かなければなりません。それだに佛様の御精神に背いたやうなことを世の中に弘めるならば、それは佛法の怨と言つても宜しい。尤も世間では、人に優しい顔をしてあまり機嫌を損なはないやうにすれば、宜いといふやうな考の人もあるけれども、慈悲心が無くして表面だけ親しくして居るといふのは、それは結局相手の人を傷けることであるから、怨と言つて宜しい。世の中にはそれが多い。どうも喧嘩をしても仕様がなから、マアいゝ加減にして交際して置かうといふのが多いけれども、それはいけない。人が間違つて居るのにそれを許して置くといふなら、その間違ひを改める機会はないのだから、慈悲の心持もなくて表面だけ親しくして居るのは、それは相手の人に害を與へることである、怨と言つて宜い。

これに反して能く糾治する、相手の間違ひを正して、その間違つた教を改めて行くやうに忠告するやうな人は、これは本當の法を護る人であつて、お釋迦様の弟子とも言つて宜しい。「彼が爲に」他の人の爲にその間違ひを直してやるといふことが、それがちやうどその人に對しては親の恩にも當るくらゐ、非常に恩の深い人と言へる。どうも人間といふものは自分の間違ひを指摘され

ると氣持が悪いものであるから、人に忠告することは誰でも嫌やなのだけれども、併しどうも思ひ切つて忠告をしてその人の間違ひを直してやるといふのは、これはマア親の慈悲に匹敵するくらゐなものである。それを實行しなければ本當の佛弟子とは言へない。「能く呵責する」間違つた思想を有つて居る者を責めるのが、それが「我弟子」即ち佛の弟子である。それを排斥も何もしないで捨て置くのは、これは佛法の中の怨であるとお釋迦様が仰しやつた。この精神をしつかりと護らなければいかぬといふことを章安大師も説明して居る。

夫法華經の寶塔品を拜見するに、釋迦・多寶十方分身の諸佛の來集はなにごぞ。令法久住故來至此等云云。三佛の未來に法華經を弘めて、未來の一切の佛子に與んとおぼしめす御心の中を推するに、父母の一子の太苦に値を見るよりも強盛にこそ見へたるを、法然いたはしともおもはで、末法には法華經の門を堅く閉て人を入れじとせき。狂兒をたばらかし

て、寶をすてさするやうに、法華經を抛させける心こそ無慚に見へ候へ。我父母を人の殺すに、父母に告げざるべしや。惡子の醉狂して父母を殺すを制せざるべしや。惡人寺塔に火を放たんに制せざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。日本の禪と念佛者とを見て制せざる者は是の如し。無慈詐親是彼怨等云云。日蓮は日本國の諸人に親しき父母也。一切天台宗の人は彼等が大怨敵也。爲彼除惡即是彼親等云云。

それだからどうしても佛教を信する以上は、佛様のお心持を正しく世の中に傳へるやうに全力を注がなければならぬ。さういふ心持で法華經の寶塔品を読んで見ると、寶塔品の中に、お釋迦様が教をお説きになつた後で、多寶如來といふ佛様が其處に出現されて、今お釋迦様の仰しやつた事は悉く是れ眞實である。今まで四十何年の間方便の教を説いて居られたけれども、今は眞實のお釋迦

様のお心持にある通りを説かれるのだといふことを言つて、その證人に立たれた。又十方の世界から多くの佛が集まつて来て、これも今お釋迦様の仰しやつた事は眞實の事だ、この教を永く皆が護つて行かなければならぬといふことの證人になつて居る。さういふやうに澤山の佛が其處に集まつて來られたのは何の爲かと言へば、「令法久住の故に」法が永く後まで遺るやうにといふ、つまり私共末の世に生れて餘程しつかりした心持を有つて居なければ世の中は無事に通れないといふやうな末法の世の者を佛様が怒れんで、その時の力になるやうにと思つて、法華經を説かれた。久しく住するといふのはたゞ普通に永く傳はるといふだけの意味ではありませぬ。末の末の世までもこの教が本當に世の中に弘まつて行く爲には餘程これはしつかりと言つて置かなければならぬ。お釋迦様もどうぞこの教を末の世に弘めるやうにといふことを仰しやつたし。又お釋迦様一人だけでは足りないと思つて、多寶如來も其處に現れて來れば、十方の佛も其處に現れて來られるといふやうな譯で、どうぞこの末の世に生れた者は佛の眞實の教であるところの法華經を信じて、さうしてこの末法のまつ暗なやうな世の中を明る

釋迦様と多寶如来と十方の佛と、三種の佛様が未來に於て、即ち世が末になつて、世の中が非常に險惡になつた時に法華經を弘めて、さうして未來の一切の佛の教を信する者に眞實の教を與へてやらうといふ思召し、その心持といふものは實に有難いものである。ちやうど親が自分のたつた一人の子供の病氣が何かで苦しんで居るのを助けようと思つて心配すると同じことである。或はそれ以上とも思はれる。全くお釋迦様の慈悲といふものは廣大なものである。それを能く辨へないで末法の世になれば人間の機根がだんだん悪くなるから、法華經などを信じないで、阿彌陀佛を念じて往生極樂を望めば宜いといふやうな、まるでお釋迦様の御精神と違ふやうな教を弘めるといふことは、これは佛の慈悲を辨へないことだから、自分達は大きな罪を犯して居るつもりはないかも知れぬけれども、本當に佛教を信する者から言へば、これは非常な罪を犯して居るものと言はなければならぬ。法然上人といふ人は如何にも學問もあるし、徳も高い人と言はれるけれども、その佛様が末法の世の者を懇れむといふお心持を有難いとも思はないで、末法の世には法華經の門を閉ぢて、法華經などを信するには及ばぬこんな難かしい經典などを研究しても仕方がないから、たゞ往生極樂を期して、この世は夢のやうな世の中だから、

この世などのことを考へないで後に至つて極樂に行くやうにといふことを皆に勧めるといふことは、ちやうど氣の狂つた子供を騙して、さうして手に持つて居る寶を捨てさせると同じやうに法華經を捨てさせるのであるから、これは海に無慚な、海に慈悲の心持の無いものと言はなければならぬ。こゝは日蓮上人の非常な決心を現はして居るのであります。實にどうも見て居られない。法華經でなければ救はれないとお釋迦様が言つて居らつしやるのに、法華經を排斥して他の信仰に人を入れるといふやうなことは許して置かれぬ。ちやうどそこらの子供が手に何か持つて居るのを騙して取ると同じことで、こんな間違つた事をその儘に許して置くことは出来ない。譬へば自分の親達を人が殺さうといふ計畫を立て居る時に、親にこれを告げてその害を免れさせるやうにするといふことが子供の情ぢやないか、自分の親が人に殺されさうになつて居るのに、ナニを殺されたつてかまはないと言つて放つて置くナンといふことは、それは人間の道に背くだらう。又心掛の悪い子供が酒にでも酔つて氣が狂つてその父母を殺さうとする時に傍で見居つて、これを抑へないでその儘にして親を殺させるといふことは出来るものではない。それと同じことであつて、折角お釋迦様が正しい教をお遺しになつて居るのに、

その教を排斥してしまつて、さうして時代に合はないやうな教を世の中に弘めるといふことは、これはマア佛の慈悲を無視したものであり、又一切の人を恵むといふ心持の足りないものであるから、これはどうもその儘に置くといふ譯には行かない。又惡人が寺や塔に火を放けようとする時に、それを火を放けさせてその儘に見て居るといふことは出来ないだらう。自分のたゞ一人の子供が重い病氣に罹つて居る時に、それに多をすえたらそのひどい病氣が癒るといふことであつたらすえない譯には行かない。親であればどうしても子供が可哀さうだから、子供に灸をすえれば泣くだらうけれども、泣くことなどに變へられはしない、泣いても宜いから灸を据えたり薬を服まして、さうして病氣を癒してやるといふのが親の慈悲です。だから世の中の人を攻撃すれば世間の人を怒るだらうけれども、怒つたつてなんだつて、そんなことは目の前のことである。縦ひ大勢の人の怒りと呼んでも、大勢の人の迫害が來ても、そんなことに屈しないで正しい教を世に弘めるといふことがそれが本當の佛弟子の精神である。日本の國の禪と念佛を見て、それを制しないでその儘に置くといふことは、やはり子供が病氣して居るのを放つて置く親のやうなものである。親が殺されるといふの用心しない子供のやうなものである。實にこ

れは人間の道として爲すべきことではない。所謂涅槃經の中にある「慈無くして許り親しむは是れ彼の怨なり」といふのはそのことである。(以下次號)

新講座案内

今ほど宗教の必要な時はあるまい、完全な宗教は又完全な道徳であり、又哲學でもある。戦術も増産も皆順正法だ。警戒すべき思想戰の要諦、秘法を修得せんとする者は、先ず來つて聴け。

日時 毎週土曜日午後二時—三時
講師 小林 一郎 先生

主催 財團 統一會
法人 統一會

本佛實在の宗教哲學 (廿三)

河合 陟 明

十六、個佛の開覺における時間究盡の二面性 (承前)

かくして皇道における八柱一字の天業即ち天行の理想より獨伊兩國の理念を批判しつゝ、眞乎最高の文化すなはち人類生存の意義および目的を最も明確に最も雄大に教ふるところのものは、そも／＼奈邊に存し何物に存し何等の處に聞くべきかを、彼等の自負心に對し張膽括目・徹底認識せしめねばならぬ。ひるがへつて暴戾米英アングロサクソンに對する憤怒の降魔劍は、これもとより菩薩梵行中の病行である。日本民族を地球上より抹殺せんとしつゝ、不遜傲慢無禮なる彼等を徹底粉砕すると同時にまた徹底救済し、もつて眞乎の梵行・聖行の精進に還らしめねばならぬ。轉じて南方諸地域ないし印度および西等の弱小民族に對しては嬰兒行の態度をもつて臨まねばならぬ。弱者を之といふはすなはち是である。さらに支那および滿洲の王道思想・天下思想は、これ聖行ないし天行の一分であるが、彼等とくに支那五千年にわたる禪讓放伐・易世革命の民族史實に至つては、もとより聖行・梵行・天行の理に適はず、こゝにはあだかも大藥王樹の大地に過ぎが如く、まさに無邊の大患より出づる病行をもつてこれを對治し、すなはち良醫の良藥仙丹一粒を投じて、鐵を點じて金丹の實相に向はしめねばならぬ。これ實に支那民族の生みし最大の哲人の一たる天台智者みづからが、夙に宇宙の實相を開顯して法界の本法を點示し、

譬如黃石中金、愚夫無識、視之謂石、獨在糞穢、都不顧錄、估客得之、融出其金、保重而已、金匠得之、造作種種、銀銅環瑣、仙客得之、鍊爲金丹、飛天入地、測日月、變通自在。野人喻一切凡夫、雖具實相、知不修習、估客喻三乘、但斷煩惱、保即空金、更無所爲、金匠喻別教菩薩、善巧方便、知空非空、出假

化物、莊嚴佛土、成就衆生、仙客喻圓教菩薩、即事而眞、初發心時、便成正覺、得一身無量身、普應一切、今經但取、金丹實相、以爲經體也、今明此經、實相之體、如大衆得底、堅不可壞、以譬體妙、圓珠音用、譬其用妙、巧智成仙、譬其宗妙。(法華玄義八下)

といへるところの法界的實相を、その祖國の地に縮寫結晶して、もつて自國を妙法化し佛乘化し、いはゆる成就衆生、淨佛國土して、四億の蒼生の苦しみを救ひ、かねて大東亞の禍亂を根本塞源して、かの孫文の三民主義といふ如き米英デモクラシーの殘滓を拂拭し、據つて以て孔聖および震旦の小釋迦たる智者大師等の古道を復活しつゝ、歴史的現實の線に沿うて東亞諸民族の共榮をもたらしす所以の道でなければならぬ。これまことに彼等が祖國の古聖の箴言たる温故知新の言にかなひ、人文發展の法則にかなひ、歴史哲學の原理にかなふところのものでなければならぬ。之に對しかの老莊より發して、しかも支那民族の歴史的運命たる内には革命・外には外敵といふ内外二面の悲劇的連續史實と結合しつゝ、つひにその一種の民族的性格を形成するに至りし道教の「卑弱自恃」といふ態度、いはゆる柔克制剛といひ、「甘心して自ら天下の谷となる」といふ如き思想は、これまた此に臨むに嬰兒行の態度をもつてすべきであらうか。はたまたかのソ聯およびユダヤ禍の如きは、かの米英と共に、表には民主主義・共產主義・を標榜しつゝ、しかも内實は顯然また陰然、有形無形の一大帝國主義的專制國家となり、かつその懷抱するところの思想は人類のバチルスとなれるもの、あだかも佛本行集經に説かるゝが如く、如來釋尊が人界に降臨せんとせらるゝに際し、諸種の國家について具さに當否を検討せられしとき、或國は

大いに威力あるも一法も則るべき行あることなし、深く邪見に着し、嚴酷暴惡にして因果を信せず、憍慢熾盛放逸自高にしてその余と共ならず、異類相雜はり、また尊卑大小の禮節なし、自ら言ふ、我れは解せり、自ら言ふ我れは知れりと、また王ありといへども敢て承事せず、自法を是なりといつて他に從つて求めず。

これ魔界の使者の一分たるもの、かくの如きものに對しては、或は武力戦をもつて或は思想戦をもつて、養正の神武と大悲の病行より發する降魔の鐵鎧を一たび徹底的に加へねばならぬ、有形無形一切の魔軍を徹底磨滅せざる限り、大東亞、否、全人類、全世界共榮の樂土は斷じてこれを望むべからず……

かくして始めて世界史の現代および將來、體亂嫡々相承けて斷絶あること無く、彼の家に生まるゝ者は深く善根を

種う、彼の家に生るゝ者は大威徳を具す、彼の家は恒に常に神靈を供養す、千子勇健にして威十方に揮ふ、常に是れ轉輪聖王の種なりと、夙に三世了達の佛祖の明鑑に識せられたる如く、天壤無窮の神勳に淵源したまふ我が萬世一系の皇室の、積慶・重輝・恢弘養正なる神武創業の大理想を經綸したまふ轉輪聖王四海徳化の天業と、さらに同時に宇宙法界の宗教的淵源として本佛常住なる絶大の靈力と感應より發する諸乘一佛乘・一天四海皆歸妙法の大徳教とが、常に毎に相照相光して遍く人類の靈肉兩面の眞正なる福社と向上をもたらすに至るであらう。佛教たると基督教たると回教たると、あるひは宗教たると哲學たると道徳たると、はたまたいかなる國家たると民族たると種族たると等々を問はず、眞に人類最奥の根本要求たる、現世の絶對權と靈界の至上權との最高統一は、こゝに始めて實現せられ、世界の文化はこゝに始めて人間生存の眞意義を確認しつゝ、さらに本佛實在の絶對界に向つて無限の大向上を迫るに至るであらう。いはゆる歴史の世界と超歴史的世界、時の世界と永遠の世界なる現當の二面にわたる、佛性の向覺・行善といふところのもの眞意味は、實にこゝにおいて始めて全く充足せらるゝものであらねばならぬ。予は實に世界史の現實に對して深甚の感なきを得ない。

今や進んで當初の論題の如く佛果における時間規定に入るべきときとなつた。由來吾々の三世に窮り無き不滅の生命が、無限の大向上を遂つて遂に法界を壓する元品の無明を斷破し、己心の奥蔵を徹底開發して無作本有の實在を顯現し全現するに至つたとき、換言すれば根本實在における超時間的無限の本質を盡すに至つたとき、こゝに自己自身の實在性を確實に認識し完全に自覺して、時を完了し時を超越するに至る。それは最初の先驗的・無作本有なる非人格的超時間性に對して、經驗的・有始今有なる、しかも人格的に高次的・現實的な超時間性である。最初の原理門におけるものを本體的超時間性といふに對してこれを徹智的超時間性といふことができる。而して自覺とは即ち始覺であつて、理の本覺の事の始覺化である。本なるが故に自でありまた自となり、自は即ち始であり今である。而もかゝる過程、或は所謂 *Dialektik* 辯證法の迂路を辿らしむる所以のものは、まさしく無明の原理の介在するによる。無明とは何ぞ、無明體相、本自不有、妄想因縁、和合而有、無明とは畢竟するに本來これ空である。しかもその空にして不有なる無明がまさしくその不有の故に、本有をして不有ならしめ無に陥らしめてゐる。故に本有は飽くまで本有たらんことを欲し、不有を破つて今有となり始有となり自有となり、以て眞に自己自身を所有する否能有するに至る。

こゝに本有と今有が完全に合體して、本有を今有化し、今有を本有化し、永遠の今・永遠に今そのものが全現する。無作を有作化し、その極限に於て有作を無作化し、勿論高次的に無作化し、即ち高次の無作となり、高次の實在となり、所謂 *Higher Realismus* となり、價值と存在との全く合一せる高次の事實 *ont. fact.* となり、換言すれば、先驗的な理の法性の無作を經驗的な事の修行の無作（即有作）に吸收し盡し、經驗完成として理事二面の中道的統一たる佛果における證智の無作・第三無作に至る、即ち「性・修・證」三段無作システムにおける最後の立場にきたる。こゝに即ち大覺果上の「證性の無作」に立つて *Ewigkeit* 永遠そのものを呼吸するに至るのである。しかも法界を壓する無明は即個人を壓する無明であり、否個人を壓する無明は即法界を壓する無明であり、かつ個人とは己心であり、而して己心即法界であり、剩へ法界無量品の無明あり、森々羅々たる法界の萬有を壓す。然しながら一個人格がその内面的普遍の根柢たる眞如法性といふ宇宙生命の絶對意志を自己一人格において顯現充足すべく、その法性意志により向覺意志による破無明動・破無明三昧・佛性開發の上求菩提に突き進むその究極に於て、自己を壓する根本無明を斷破したるときは、即ちまた森羅萬象を壓する總ての無明を斷破したるときであつて、こゝにこの一大人格は即然として全法界を *at one stroke* 一網打盡に直觀し、遍滿法界の實在的眞如を體現するに至る。こゝに即ち個體人格の佛格完成がある、即ち成佛であり開覺であるのであつて、これを人格の威力はたまた如來の威神より語らば即ち降魔成道であり、大哉大悟大聖主であり、これを靈智の上よりいはゞ即ち無上菩提を成就せられたる正遍知世尊であり、これを果徳の上より説かば即ち道風徳香薰一切、於法自在爲三法王であり、又更にこれを絶對人格における美の實在性の論理として、哲學的眞理の最高思想たる宗教的對象の美的具象性そのものを著かに示すならば、如來の妙色湛然として住し、佛身希有、端嚴殊特、成就第一微妙之色、紫金法身、相相實相、方照曜甚明微なるものである。

而してかくの如き理の本覺の始覺化に於て、先驗的無作本有の根本實在たる眞如の超時間性を究盡したときは、又方しくその超時間性の包攝する所の全時間性をも、共にこれを究盡するといふものでなければならぬ。即ち宇宙法界を貫く絶對歴史の現實事實たる時そのものの無限なる全體系を盡すといふことではなければならぬ。唯佛與佛、乃能究二盡、諸法實相なることの眞意義は、まづこれを時間規定において見られねばならぬ、けだし時は實在の根本形式な

るがゆゑである。此に於て盡すといふことは二様の意味があつて、しかも一に歸する。即ち自己自身は菩薩行としての働きものたる地位を完了し、いはゆる因果果滿して佛陀としての菩提を成就したのであるから、天台説くが如く、菩薩有行、見不了了、但如華開、諸佛以不行故、見則了了、譬如華落蓮成、こゝに無明永盡、妙覺圓滿、果上無事、眞常湛然たるものとなつたのであり、即ち生命向上の向覺發展の無限の時を消費し盡して、據つて以てその時を完了し、時を食み盡して時を不要とし、時を全く呑吐し盡した、無限の時を全く自己に同化し消化し終つたのである。しかしかく時を全く不要にすると同時に、否するや否や、翻つて又直ちにその時を要する。それに又二方向がある、一は過去の時であり、一は未來の時である。しかし未來の時に就ては後に譲り、まづ過去を論じよう。

佛果の開覺に於て、時を不要とするや否や又逆に時を要するとは何であるか、それは如何なる意味であるか。自己が無限の時を食み盡して、時に最後の訣別を告げたとき、翻つて直ちに時そのものの全経歴を見なければならぬ。時は固より存在の範疇である、時は行爲の形式であり、自覺の影であり、宇宙萬有の運動過程の枠である。先にもいつた如く、ニュートンの萬有引力も眞如絕對意志の射影に外ならず、物質と雖もライブニッツの所謂微分的・瞬間的意識を有するのである。一切の存在は本有なるが故に、存在の一切の運動はそこに何物をも加ふる餘地なく、従つてたゞ自覺の外にはない、宛かもまた存在の根本構造はまさしく覺自體であるのである。萬物の運動は自覺の變形である、それは知るといふことの無限の *modus* 様相である。今絕對の開覺によつて眞に實在を見る即ち時を盡すといふには、時の内容たる本有實在の、その *modus* 様相その *Phänomena* 現象の總てを盡さなければならぬ。時を見るとは時の内容を見ることである、それはまづ時における自己自身の全経歴を見ることがであり、更に時における全宇宙の全経歴を見ることではなければならぬ。眞に自己を知るには全宇宙を知らなければならぬ。しかも二者は結局において一に歸する。自己の全経歴は宇宙の全経歴と關聯する、それと無盡の縁起・無盡の感應を有する、否既に有し來つたものである。何となれば自己は十界五具一念三千といふ全法界社會の全法界歴史に、否その九界生死の輪廻界中に、出沒轉變浮沈消長し來つたものであり、而して今や漸く正に佛果の大覺位に到達したものであるからである。否そもそも眞の自己・眞の己心とは實に全法界そのものであるからである。

南無妙法蓮華經 昭和十八年四月二十日

大藏經要義續篇 (第廿八)

本 多 日 生

紙面の都合により暫らく中絶してゐた「大藏經要義續篇」は、此度 本多上人第十三回忌追憶記念會の席上、時時博士から、現下の大藏經要義が未完成であることを甚だ遺憾とする旨の御遺囑あつたことに鑑み、現下としては既に大藏經全部の要文摘出は完了されてゐたが、唯その註釋がなされてないだけを残念に思ふ。併し今後は出来る限り要文を連載して百年の知己を快つことにする。各位乞御諒承。

維摩詰所說經 第九卷の五

姚秦三藏鳩摩羅什譯

佛國品第一

是の如く我聞きき。一時 佛 毗耶離耨羅樹園に在して、大比丘衆八千人と俱なりき。菩薩三萬二千あり。(皆)衆に知識せられ、大智・本行皆悉く成就せり。諸佛の威神の建立する所なり。法城を護らんが爲に正法を受持し、能く師子吼して名十方に聞えたり。衆人請せざるに友として之を安んじ、三寶を紹隆して能く絶えさらしめ、魔怨を降伏

して諸の外道を制す。悉く已に清淨にして永く蓋纏を離れ、心常に無礙解脫に安住して、念・定・總持・辯才斷えず。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧及び方便力具足せざる無く、無所得（無我の立場）不起法忍（無生法忍）に違べり。已に能く隨順して不退の輪を轉じ、善く法相を解して、衆生の根を知り、諸の大家を蓋うて無所畏を得たり。功德・智慧以て其の心を修め、相好身を嚴りて色像第一なり。諸の世間の所有の飾好を捨て、名稱の高遠なること須彌に踰え、深信の堅固なること猶金剛の若し。法寶普く照して甘露を雨らし、衆の言言に於て微妙第一なり。深く緣起に入りて諸の邪見を斷じ、有無の二邊復餘習無し。法を演べて畏無きこと師子吼の猶く、其の講說する所乃ち雷の震ふが如し。量有ること無くして、已に量過ぎたり。衆の法寶を集むること海の導師（水先案内）の如く、諸法の深妙の義に了達して、善く衆生往來の所趣、及び心の所行を知り、無等等の佛の自在慧・十力・無畏・十八不共にして一切諸惡趣の門を闕閉すれども、而も五道に生じて以て其の身を現じ、大醫王と爲りて善く衆病を療し、病に應じて藥を與へ、服行することを得せしむ。無量の功德皆成就し、無量の佛土皆嚴淨す。其の見聞する者、益を蒙らざるは無く、諸有の所作、亦唐捐ならず。是の如く一切の功德皆悉く具足せり。

爾の時、毘那離の城に長者の子有り、名けて寶積と曰ふ。即ち佛前に於て佛を以て頌して曰さく、
法王の法力群生に超え

能善く諸の法相を分別し

第一義に於て動ぜず

已に諸法に於て自在を得たまへり

是の故に此の法王を稽首したてまつる。

三たび法輪を大千に轉じて

其の輪本來常に清淨なり

天人道を得たる此を證と爲し

老病死を度する大醫王

當に法海の徳無邊なるを禮すべし

毀譽に動ぜざること須彌の如く

善と不善とに於て等しく慈を以てしたまふ。

心行の平等なること虚空の如し
衆生は類に隨つて各解を得。

孰れか人寶を聞いて敬承せざらん。佛は一音を以て法を演説したまふに

爾の時、長者の子寶積、此の偈を説き已つて佛に白して言さく、世尊、是の五百の長者子は、皆已に阿耨多羅三藐三菩提心を發して、佛國土の清淨を得んことを聞かんと願へり、唯願くは世尊、諸の菩薩の淨土の行を説きたまへ。佛の言はく、善哉、寶積、菩薩は所化の衆生に隨ひて佛土を取る。

譬へば人有りて空地に宮室を造立せんと欲するに、意に隨つて無礙なり。

寶積、當に知るべし、直心は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、不詔の衆生來つて其の國に生ぜん。深心は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、功德を具足する衆生來つて其の國に生ぜん。菩提心は是れ菩薩の淨土なり、布施は是れ菩薩の淨土なり、持戒は是れ菩薩の淨土なり、精進は是れ菩薩の淨土なり、禪定は是れ菩薩の淨土なり、智慧は是れ菩薩の淨土なり、四無量心は是れ菩薩の淨土なり、四攝法は是れ菩薩の淨土なり、方便は是れ菩薩の淨土なり、三十七道品は是れ菩薩の淨土なり、廻向心は是れ菩薩の淨土なり、自ら戒行を守りて彼の國を讓らざるは、是れ菩薩の淨土なり、十善は是れ菩薩の淨土なり。

是の如く寶積、菩薩其の直心に隨ひて則ち能く行を發し、其の發行に隨ひて則ち深心を得、其の深心に隨ひて則ち意調伏し、意の調伏に隨ひて則ち説の如く行じ、説の如く行するに隨ひて則ち能く廻向し、其の廻向に隨ひて則ち方便有り、其の方便に隨ひて則ち衆生を成就し、衆生を成就するに隨ひて則ち佛土淨く、佛土の淨きに隨ひて則ち説法淨く、説法の淨きに隨ひて則ち智慧淨く、智慧の淨きに隨ひて則ち其の心淨く、其の心の淨きに隨ひて則ち一切の功德淨し。是の故に寶積、若し菩薩淨土を得んと欲せば當に其の心を淨くすべし、其の心の淨きに隨ひて則ち佛土も淨かるべし。

方便品第二

爾の時に、毗耶離の大城の中に長者あり、維摩詰と名づく。已に曾て無量の諸佛を供養して深く善本を植え、無生忍を得て辯才無礙なり。神通に遊戲して、諸の總持に達し、無所畏を獲て魔の勞怨を降し、深法門に入り、智度に善くして方便に通達す。大願成就して衆生の心の所趣を明了にし、又能く諸根の利鈍を分別す。久しく佛道に於て心已

に純淑にして大乘を決定せり。

諸の異道を受くれども正信を毀らす、長典を明かにすと雖も常に佛法を樂ひ、諸の四衢に遊びて衆生を饒益し、治政の法に入りて一切を救護す。講論の處に入りては導くに大乘を以てし、諸の學堂に入りては童蒙を誘開し、諸の姪舎に入りては欲の過を示し、諸の酒肆に入りては能く其の志を立つ。若し長者に在りては長者の中の尊として爲に勝法を説き、若し居士の中に在りては居士の中の尊として其の貪著を斷じ、若し刹利に在りては刹利の中の尊として教ふるに忍辱を以てし、若し婆羅門に在りては婆羅門の中の尊として其の我慢を除き、若し大臣に在りては大臣の中の尊として教ふるに正法を以てし、若し王子に在りては王子の中の尊として示すに忠孝を以てし、若し内官に在りては内官の中の尊として宮女を化政し、若し庶民に在りては庶民の中の尊として福力を興さしめ、若し梵天に在りては梵天の中の尊として壽ふるに勝慧を以てす。

長者維摩詰は、是の如き等の無量の方便を以て衆生を饒益せり。其の方便を以て身に疾有るを現するや、其の疾を以ての故に、國王・大臣・長者・居士・婆羅門等、及び諸の王子、並に餘の官屬無數千人、皆往いて疾を問ふ。其の往ける者に、維摩詰身の疾に因以て廣く爲に法を説く。諸の仁者よ、是の身は無常にして、強きこと無く、力無く、堅きこと無く、速かに朽つるの法にして信す可らず。苦爲り、惱爲り、衆の病の集る所なり。諸の仁者よ、此の如きの身は、明智の者の怙まざる所なり。

諸の仁者よ、此は患厭ふ可きものなれば、當に佛身を樂ふべし。所以は何ん、佛身とは即ち法身なり、無量の功德智慧より生じ、戒・定・慧・解脫・解脫知見より生じ、慈悲喜捨より生じ、布施・持戒・忍辱柔和・勤行精進・禪定解脫三昧・多聞智慧の諸波羅蜜より生じ、方便より生ず。

諸の仁者よ、佛身を得て一切衆生の病を斷ぜんと欲せば、當に阿耨多羅三藐三菩提の心を發すべし。是の如く長者維摩詰は、諸の疾を問ふ者の爲に、應の如く法を説ひて、無數千人をして皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。

記事

本部 團報

御陰誕會 毎月八日は大詔奉戴日であるが、殊に四月八日は大聖釋迦牟尼如來非生現生の極めて意義深い日である。嗚々の産誕は八十年一貫の大節子規であつた。即ち「天上天下唯我獨尊三界皆苦我當安之」是れ世間周知の事實で、將來に於ても然かあるべきことを斷言出来る。この一點を拜しても壽基本佛の應現といふことが會得さるであらう、赤ん坊が直ちに歩く譯はないとか、口をきく譯あるまいと囑斷することは、モット心靈界のことを研鑽してからの上で論議すべきである。短見者流には極樂とか地獄とかいふ世界は何處にあるか、唯我等の觀念論だと定めてしまふ者は、諸法の實相を知らない唯物主義の者共であるまいか、それでは新秩序の建設は望めないと思ふ、大東亞を指導するに足る文化工作は、偉大なる大覺者の明教を閉却してはならない。畢竟するに人間の魂の問題を忘れては、完全不可能なる理の當然である、「汝自身を知れ」のモット一段英には、超人格者の實在を拜することである。爰に嶽として日蓮聖人の開目抄が光つてゐる。本多上人は「開目抄を讀まずして東洋の文明を説するは僞説なり」と仰せられた。宛に角意義深い大聖の降誕を祝福すべく八日朝六時、莊嚴された誕生佛を瞻仰しつ法要勤修後、國民儀禮あつてから護國理事並に和實義見師の法話を滿喫、八時前に閉會、各自職域御奉公へと向ふ。團員有志並に酒悅立正産報會員等にて殆んど立錫の餘地もない盛況であつた。

團員總會 四月十八日の午後二時 定期總會を開催して先づ修法後十七年度の事業會計報告並に本年度の豫算承認と事業計劃の懇談あつて四時半頃散會。
左に會計報告を團員各位に提示致します。

昭和十七年度收支計算 (自昭和十七年四月初日 至同 十八年三月末日)

一、收入之部	總 收 入
一金七千貳百參拾壹圓參拾六錢也	
内 譯	
金壹千貳百・五〇	維持費及寄附金
金壹千八拾・八〇	圖書並諸料
金 參九拾・參〇	書籍經本代
金 九參四・五〇	法廷喜納金
金壹八〇〇・〇〇	理事長助成
金 八〇〇・〇〇	利 息
金 壹六六・〇〇	雜 收
金 八參四・貳六	前 年 度 越 高
二、支出之部	總 支 出
一金六千貳百七拾六圓六拾四錢也	
内 譯	
金壹千參貳・八〇	印刷製本代
金貳千四八六・九四	印化並諸師費
金 貳千四參・〇〇	通信通話費
金 貳千四・〇〇	諸稅賦課金
金 參八七・四壹	書物及文房費

金 貳拾五・貳八
 金 五十四・五〇
 金 壹九七・八貳
 金 壹四四・〇〇
 金 參〇壹・八貳

電燈燃料水道費
 團員慶弔費
 交通費
 速記費
 什器並修理費

三、收支差引勘定
 一金九百五拾四圓七拾貳錢也 次年度へ繰越
 以上

其他 每週土曜日午後二時より小林先生の講義、並に第一
 第三土曜午後三時よりの婦人會、及び毎月曜日朝六時の信行會
 は時節祈禱々眞劍味を以て精進されてゐる。愛國護法の士女萬
 障を排して参加を望む。

團費誌料維持費及寄附金領收 (自三月二十一日至四月二十日)

一金四拾五圓也 東京 横山正三殿
 一金參圓也 同 原むめ殿
 一金五圓也 愛知縣 山本金太郎殿
 一金拾七圓貳拾錢也 川崎 毛見春吉殿
 一金四圓四拾錢也 小田原 中村村殿
 一金貳圓貳拾錢也 東京 金井るい殿
 一金貳圓貳拾錢也 名古屋 山田健治郎殿
 一金貳圓貳拾錢也 奈良 村田よし子殿
 一金壹圓貳拾錢也 福岡縣 大久保久市殿
 一金貳圓五拾錢也 神奈川 東端兼吉殿

一金貳圓五拾錢也 東京 竹村久殿
 金四圓四拾錢也 千葉縣 須無外殿
 金貳圓貳拾錢也 津島縣 中村芳殿
 金貳圓五拾錢也 靜岡縣 橋本美寺殿
 金貳圓貳拾錢也 東京 支妙寺殿
 金貳圓貳拾錢也 名古屋 大入眞會殿
 金七圓貳拾錢也 東京 順道會殿
 金六拾圓也 同 柴田武治殿
 金貳圓貳拾錢也 同 村松きく殿
 金貳圓貳拾錢也 同 竹原小三郎殿
 金貳圓貳拾錢也 同 梶川福太郎殿
 金貳圓貳拾錢也 同 平岡越郎殿
 金壹圓五拾錢也 東京 石井幸生殿
 金貳圓五拾錢也 同 古澤タミ殿
 金貳圓五拾錢也 同 大塚なみ子殿
 金貳圓五拾錢也 同 大竹和夫殿
 金貳圓五拾錢也 同 大井和夫殿
 金貳圓貳拾錢也 同 岩井兵衛殿
 金六拾圓也 同 中村清兵衛殿
 金貳圓貳拾錢也 同 中村榮三殿
 金八圓八拾錢也 同 中村良三殿
 金貳圓五拾錢也 同 川越高村殿
 金貳圓貳拾錢也 千葉縣 千葉縣 木村日香殿

右雜有入帳仕候也 (以是領收證代用)
 財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖語錄 改 特價 金壹圓九拾錢
 法華經要義 賜天覽 同 金貳圓五拾錢
 日蓮主義心髓 同 金壹圓五拾錢
 日蓮主義精要 同 金貳圓九拾錢
 法華經要品 同 金五拾錢
 本尊意識に就て 同 金貳拾錢
 法華經の心髓 同 金壹圓五拾錢
 黎明の原理 同 金五圓

佛敎の心髓 同 送料貳圓
 勸行作法 同 金拾錢
 本多日生上人 同 金壹圓七拾錢
 佛敎の心髓 同 送料貳圓

河合珍明著 皇道と日蓮主義 定價 金壹圓

東京市小石川區羽音町六ノ十七
 財團法人 統一團出版部
 振替東京九四二〇番

一、發行所 東京市小石川區羽音町六ノ十七
 二、發行所 東京市四谷區內藤町一
 三、發行所 東京市山田區英二
 四、發行所 東京市小石川區羽音町八ノ十一
 五、發行所 野島好文堂印刷所 東京二〇五二

發行所 財團法人統一團
 電話半込五三三六番
 振替東京九四二〇番
 東京市神田區淡路町二丁目九番地
 配給元 日本出版配給株式會社

昭和十八年四月二十七日印刷納本
 昭和十八年五月一日發行
 (第五百七十八號)

定價一紙 金貳拾錢 送料壹錢
 半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
 一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注 ○○御申込へ總テ前金ノ事
 ○前金相切候節へ包紙ニ其旨表示可
 ○前金相切候節へ包紙ニ其旨表示可
 知ノ事



統

財團法人

統一團發行

次 目

法 悅 と 願 行 (其三)	本 多 日 生
開 目 鈔 講 話 (完結)	小 林 一 郎
本佛實在の宗教哲學(二十四)	河 合 陟 明
大藏經要義續篇(第二十九)	本 多 日 生
記 事	
○本部團報	
○福島教信	
○入帳報告	

號 月 六 年 八 十 四 第

統 一

昭和十八年五月二十七日 第三號
昭和十八年五月二十七日 第三號
昭和十八年五月二十七日 第三號
昭和十八年五月二十七日 第三號
昭和十八年五月二十七日 第三號
昭和十八年五月二十七日 第三號

第五百七十八號

第四十八年 五月號

昭和十八年六月一日發行(每月一號一日發行)
第五百七十九號